

7月予報（全12枚）

病防第31号  
平成18年6月30日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）  
平成18年度発生予報第4号を下記のとおり発表したの送付します。

平成18年度発生予報第4号（7月予報）  
平成18年6月30日

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成18年5月26日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
降水量	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	40	40	20

2 発生予報 概要

作物		病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
			平年比	前年比			平年比	前年比
水稲	早期	穂いもち	やや少	並	茶	もち病	並	並
	早植	葉いもち	やや少	やや多		チャノカモノハシ	やや少	並
	普通期	葉いもち	やや少	やや多		チャハマキ	やや多	やや多
	早期・早植	紋枯病	並	並		チャノホソガ	やや多	並
	早植・普通期	ツマグロヨコバエ	やや少	並		チャノハダシ	やや多	やや多
		ヒメトビウカ	並	並		チャノミドリメヨコバエ	やや少	やや少
		セジロウカ	やや多	多		カザリハダニ	やや少	少
		ヒメトビウカ	やや多	多	カンキツ	かいよう病	やや多	やや少
		コブノメガ	並	やや多		黒点病	並	やや多
茶	早期	カメシ類	やや多	やや多	ナシ	ミカンハダニ	並	やや多
		炭疽病	並	並		黒星病	やや多	やや多

作 物	病虫害名	発 生 量		作 物	病虫害名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
ブドウ	べと病	並	やや多	夏秋果菜類 (高冷地)	灰色かび病	やや多	並
果樹全般	果樹かみシ類	多	多		細菌性病害 (黒腐病等)	並	並
夏秋トマト (高冷地)	葉かび病	並	並	夏秋 果菜類	コジラミ類	やや少	やや少
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	やや多	やや多		アザミウマ類	やや少	やや少
夏秋カリ (高冷地)	べと病	並	並	イチゴ (育苗床)	ハダニ類	やや多	やや多
イチゴ (育苗床)	うどんこ病	並	並	夏秋キャベツ (高冷地)	コナガ	並	並
	炭疽病 (露地)	やや多	やや多		ハモシトウ	並	並
	炭疽病 (雨よけ)	並	並	野菜全般	オオムシカ	並	並

### 3 予報概要、根拠、対策等

#### 水稻

#### 1) 穂いもち(早期)

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の早期水稻の巡回調査では、葉いもちの発病株率 0.5%(平年 7.2%)と平年より少ない発生であった。

イ BLASTAM の判定結果では、5月から現在までの好適条件の出現日数は平年並である。

ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の葉いもちの発生は概ね平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ後期及び穂揃い期に防除する。

#### 2) 葉いもち(早植)

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の早植水稻の巡回調査では、葉いもちの発病株率 0.0%(平年 0.7%)と平年より少ない発生であった。

イ BLASTAM の判定結果では、5月から現在までの好適条件の出現日数は平年並である。

ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は概ね平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア いもち菌は 25～28℃ で湿度が高いときに増殖しやすいため、気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。

#### 3) 葉いもち(普通期)

- ( 1 ) 発生量：やや少
- ( 2 ) 根拠 ア 6 月の普通期水稻の巡回調査では、移植直後のため本田での発病を認めなかった( 平年の発病株率 0.0% )。  
イ 病害虫防除員からの報告では、苗いもちの発生は平年並～少であった。  
ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
- ( 3 ) 対策 ア いもち病に効果のある育苗箱施用剤を使用していないほ場においては、気象条件(いもち菌は 25 ～ 28 で湿度が高いときに増殖しやすい)に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。
- 4 ) 紋枯病( 早期・早植 )
  - ( 1 ) 発生量：並
  - ( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、発病を認めていない( 平年の発病株率 0.0 % )。  
イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平年比少であった。  
ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
  - ( 3 ) 対策 ア 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行う( 要防除水準：穂ばらみ期の発病株率 20 % )。
- 5 ) ツマグロヨコバイ( 早植・普通期 )
  - ( 1 ) 発生量：やや少
  - ( 2 ) 根拠 ア 6 月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり 0.2 頭( 平年 0.2 頭 )と平年並の発生であった。  
イ 生産環境研究所( 合志市 )における予察灯調査では、平年より少なかった。  
ウ 病害虫防除員の報告では、6 月の発生は平年並～やや少であった。  
エ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
- 6 ) ヒメトビウンカ( 早植・普通期 )
  - ( 1 ) 発生量：並
  - ( 2 ) 根拠 ア 6 月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり 0.4 頭( 平年 0.3 頭 )と平年並の発生であった。  
イ 生産環境研究所( 合志市 )における予察灯調査では、平年よりやや少なかった。  
ウ 病害虫防除員の報告では、6 月の発生は概ね平年並であった。  
エ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
- 7 ) セジロウンカ( 早植・普通期 )
  - ( 1 ) 発生量：やや多
  - ( 2 ) 根拠 ア 6 月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり 1.9 頭( 平年 0.7 頭 )と平年よりやや多い発生であった。  
イ 生産環境研究所( 合志市 )と天草農業研究所( 天草市 )における予察灯、ネットトラップの調査では、6 月 13 ～ 15 日及び 23 ～ 25 日( 現在 )にまとまった飛来が見られている。  
ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
  - ( 3 ) 対策 ア 育苗箱施薬剤を使用していないほ場では、ほ場密度が高い場合に本田散布を行う( 要防除水準：水稻移植後 10 日までは 2 ～ 5 頭 / 株、11 日以降は 6 ～ 10 頭 / 株 )。
- 8 ) トビイロウンカ( 早植・普通期 )
  - ( 1 ) 発生量：やや多
  - ( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、発生を認めていない( 平年 0.0 頭 )。  
イ 生産環境研究所( 合志市 )の予察灯及びネットトラップ調査では、平年より約 40 日早く初飛来を確認し( 5 月 8 日：1 頭 )、その後も単発ではあるが飛来が確認されている( 5 月 17 日：1 頭、6 月 3 日：1 頭、6 月 12 日：2 頭、6

月 16 日：1 頭）。天草農業研究所（天草市）の予察灯調査では、6 月 15 日に初飛来を確認し（4 頭）、17 日にもややまとまった飛来が見られている（4 頭）。飛来源となる海外での発生量が多いと報告されており、今後の飛来量は平年より多いと予測される。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

（3）対策 ア 今後の飛来情報と、ほ場での発生状況に注意し防除を行う【要防除水準：第 1 世代成虫羽化期（およそ 7 月中旬～8 月上旬）において、20 頭以上 / 100 株】。

#### 9）コブノメイガ（早植・普通期）

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6 月の巡回調査では、巻葉数は 0.0 枚 / 株（平年 0.0 枚 / 株）と平年並だった。

イ 天草農業研究所（天草市）における予察灯調査では、6 月 25 日に初飛来を認めたが（1 頭）、ほぼ平年並であった（平年の初飛来日 6 月 26 日）。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

（3）対策 ア コブノメイガに効果のある育苗箱施用剤を使用していないほ場において発生が多い場合は、第 2 世代幼虫期に本田散布を行う（要防除水準：第 1 世代において被害株率 20 % 以上）。

#### 10）カメムシ類（早期）

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 上天草市松島町におけるイタリアンライグラスでのすくい取り調査では、ミナミアオカメムシ、アカスジカスミカメ、シラホシカメムシの捕獲数は過去 3 カ年よりやや多かった。ホソハリカメムシ及び最重要種であるクモヘリカメムシの捕獲数は過去 3 カ年並だった。

イ 病害虫防除員の報告によると、6 月の発生は平年よりやや多であった。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

（3）対策 ア 毎年被害を受ける地域では、穂揃期とその 1 週間～10 日後に薬剤散布を行う。

イ 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するため行わない。

ウ 雑草防除などの管理がなされている休耕田や水田畦畔においては、「イネ」に登録のある薬剤を「イネ」の登録の範囲内で使用し、密度を抑える。

### 茶

#### 1）炭疽病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6 月の巡回調査では、発病葉数は 2.5 葉 /  $\text{m}^2$ （平年 1.8 葉 /  $\text{m}^2$ ）と平年よりやや多い発生であったが、前年からの旧葉での発生が多く、新葉での発生は少なかった。

イ 気象予報によると、7 月の降水量は平年並が多い予想である。

（3）対策 ア 今後、曇りや雨の日が多く、感染に好適な条件になることが予想されるため、常発地では、摘採残葉の発病状況等に注意し、三番茶萌芽期～1 葉期に防除を行う。

#### 2）もち病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6 月の巡回調査では、発病葉を認めず（平年 0.6 葉 /  $\text{m}^2$ ）、平年よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、7 月の降水量は平年並が多い予想である。

- (3) 対策 ア 二番茶に多発した茶園では、二番茶摘採後に整せん枝を行い、発病葉を摘採面から除去する。
- 3) チャノコカクモンハマキ
- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉を認めず(平年 0.6 枚/㎡)、平年よりやや少ない発生であった。  
 イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、平年より少ない発生であった。  
 ウ 茶業研究所(御船町)の調査では、平年並の発生であった。  
 エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少であった。  
 オ 気象予報によると、7月の降水量は平年並が多い予想である。
- (3) 対策 ア 摘採直後には場を見回り、発蛾最盛期から7～10日後に、ふ化後間もない若齢幼虫を対象に防除を行う。  
 イ 中刈り等の更新は、産卵及び生息場所を失うため密度低下に効果がある。
- 4) チャハマキ
- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉は認められず(平年 0.01 枚/㎡)、平年並の発生であった。  
 イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、6月4半旬に平年より高いピークが見られ、平年より多い発生であった。  
 ウ 茶業研究所(御船町)の調査では、6月3半旬に平年より高いピークが見られ、その後誘殺数は減少したが、平年より多い水準であった。
- (3) 対策 ア チャノコカクモンハマキに準じる。
- 5) チャノホソガ
- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉数は 25.3 枚/㎡(平年 5.1 枚/㎡)と平年より多い発生であった。  
 イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、5月までほとんど誘殺は認められなかったが、6月以降から平年並の発生となった。  
 ウ 茶業研究所(御船町)の調査では、平年並の発生であった。
- (3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の萌芽～1葉期に防除する。  
 イ 摘採間近になって三角葉巻が見られた場合は、防除せず、摘採を早めて被害の軽減に努める。
- 6) チャノキイロアザミウマ
- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は 24.4 % (平年 9.5 %) と平年より多い発生であった。  
 イ 生産環境研究所(合志市)の粘着トラップでは、平年より多い発生となった。  
 ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～やや少であった。
- (3) 対策 下記の別枠を参照。

## 二番茶期以降のチャノキイロアザミウマ防除対策

本年は、5月下旬から6月中旬にかけて少雨であったこともあり、一番茶期以降から多くの茶園でチャノキイロアザミウマが多発しています。今後、梅雨明け後から急激に増加することとも予想されるため、二番茶期以降の発生に注意して管理を行ってください。

- 1) 三番茶を摘採する園では、新芽を加害をするため、萌芽期から1葉期に防除を行う。  
 また、二・三番茶摘採後も摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、

摘採後に防除を行う。

- 2) 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤で防除する。
- 3) 薬剤等その他の詳細については、農薬使用基準を遵守し、危被害防止に努める。

【 J P P - N E T チャノキイロアザミウマ発生時期予測システムによる予察結果 】

アメダス毎正時データ及び平年値データを利用して、チャノキイロアザミウマの第 3・4 世代の発生時期を予察した。

地点名	第 3 世代	第 4 世代
鹿北	7/14	8/1
南小国	7/24	8/13
岱明	7/6	7/24
菊池	6/28	7/26
阿蘇乙姫	7/27	8/18
熊本	6/30	7/18
高森	7/25	8/14
三角	7/6	7/24
甲佐	7/6	7/24
松島	7/8	7/27
本渡	7/8	7/26
八代	7/3	7/21
水俣	7/5	7/23
人吉	7/8	7/27
上	7/9	7/27
牛深	6/30	7/19

6 月 26 日以降は平年値データを使用

7) チャノミドリヒメヨコバイ

( 1 ) 発生量：やや少

( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、寄生葉率は 0.8 % ( 平年 4.0 % ) と平年より少ない発生であった。

イ 茶業研究所 ( 御船町 ) の調査では、平年より少ない発生であった。

ウ 病害虫防除員の報告によると、6 月の発生は平年比並～やや少であった。

エ 気象予報によると、7 月の降水量は平年並か多い予想である。

( 3 ) 対策 ア チャノキイロアザミウマに準じる。

8) カンザワハダニ

( 1 ) 発生量：やや少

( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、寄生葉率 4.2 % ( 平年 7.0 % ) と平年より少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、7 月の降水量は平年並か多い予想である。

( 3 ) 対策 ア 発生が見られた場合は、萌芽期～1 葉期に防除を行う。

カンキツ

1) かいよう病

( 1 ) 発生量：やや多

( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、新葉の発病葉率は 5.0 % ( 平年 3.6 % ) で平年よりやや高かった。

イ 果樹研究所（宇城市）の調査（無防除樹）では、6月4半旬の春葉の発病率は2.9%（平成11.6%）、果実の発病率は0.0%（平成7.4%）と、共に平成より低かった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや多～やや少である。

エ 気象予報によると、7月の降水量は平成並か多い予想である。

（3）対策 ア 夏秋梢のミカンハダニの食害痕には、本病が発病しやすいので防除を徹底するかせん除する。

イ 強い風雨が予想されるときは、その前後に薬剤による防除を行う。

## 2）黒点病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 気象予報によると、7月の降水量は平成並か多い予想である。

イ 果樹研究所（宇城市）の調査（無防除樹）では、6月4半旬の果実の発病率は12.0%（平成18.4%）と平成よりやや低かった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～少である。

（3）対策 ア 累積降水量200～250mmまたは前回散布からの経過日数25～30日を目安にして薬剤散布を行う。

## 3）ミカンハダニ

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率20.8%（平成26.3%）で平成並の発生であった。

イ 果樹研究所（宇城市）の調査（無防除樹）では、6月5半旬の寄生葉率は10.0%（平成31.1%）と平成より低かった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成よりやや多～やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平成並で、降水量は平成並か多い予想である。

（3）対策 ア ミカンハダニの要防除水準はメス成虫の寄生葉率30～40%、10葉当り5～10頭である。

イ ハダニの薬剤防除は抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

## ナシ

### 1）黒星病

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率0.3%（平成0.8%）で平成並であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや多～やや少であった。

ウ 気象予報によると、7月の降水量は平成並か多い予想である。

（3）対策 ア 梅雨期の防除を徹底するとともに園の排水に努める。

## ブドウ

### 1）べと病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率2.0%（平成1.6%）で平成並の発生であった。

イ 病害虫防除員の報告では、発生が早かったが防除を徹底したため、現在は少発生であった。

ウ 気象予報によると、7月の降水量は平成並か多い予想である。

（3）対策 ア 発病後は防除が難しいので、予防散布に努める。

## 果樹全般（スモモ、モモ、カキ、ナシ、ブドウ、カンキツ類等）

### 1）カメムシ類

- ( 1 ) 発生量：多（特に県南部）
- ( 2 ) 根拠
  - ア 本年は越冬数が多く、春からフェロモントラップや予察灯への誘殺数が多かった。
  - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～少の発生であるが、県南部では多～やや多の発生であった。
  - ウ 本年はカメムシの繁殖源であるヒノキの球果量は平年並であるが、カメムシの発生が多い地域では、球果を食べ尽くして果樹園に飛来する可能性がある。
- ( 3 ) 対策
  - ア カメムシの発生は地域差が大きいので、注意を怠らず園をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

## 野菜病害

### 夏秋トマト、ミニトマト（高冷地）

- 1 ) 葉かび病
  - ( 1 ) 発生量：並
  - ( 2 ) 根拠
    - ア 6月の巡回調査では、発生は認めなかった(平年の発病株率 0.5 %)。
    - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
    - ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
  - ( 3 ) 対策
    - ア 発病初期から葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行い、被害葉や老化葉は除去する。
    - イ 肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

### 夏秋ナス（平坦地）

- 1 ) すすかび病
  - ( 1 ) 発生量：やや多
  - ( 2 ) 根拠
    - ア 6月の巡回調査では、発病株率 1.7 % (平年 0.1 %) と平年比やや多の発生であった。
    - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。
    - ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
  - ( 3 ) 対策
    - ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。
    - イ 初期の発病葉は早めに除去する。また、ハウスやその周辺に病葉を放置すると伝染源になるので、摘除後は速やかに処分する。
    - ウ 薬剤防除は発生初期に行う。

### 夏秋キュウリ（高冷地）

- 1 ) べと病
  - ( 1 ) 発生量：並
  - ( 2 ) 根拠
    - ア 6月の巡回調査では、発病株率 25.3 % (平年 8.5 %) と平年比やや多の発生であったものの、発生は一部のほ場での多発に限られていた。
    - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
    - ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
  - ( 3 ) 対策
    - ア ハウス栽培では、換気を良くし過湿防止に努める。
    - イ 肥培管理を良くし肥料切れしないようにする。
    - ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

### イチゴ（育苗床）

- 1 ) うどんこ病
  - ( 1 ) 発生量：並



- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査(育苗床)では、発病株率は3.0%(平成24.3%)と平年比やや少の発生であった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～やや少であった。  
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。
- (3) 対策 ア 多発すると防除が困難なため初期防除を徹底し、薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。発病葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。  
イ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。  
ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 2) 炭疽病

- (1) 発生量：やや多(露地) 並(雨よけ)
- (2) 根拠 ア 2～3月に実施した親株保菌調査(一昨年より実施)では、萎凋性炭疽の保菌小葉率が2.6%(一昨年16.7%、昨年3.4%)、葉枯れ炭疽が0.5%(一昨年11.7%、昨年0.8%)であった。  
イ 6月の巡回調査(育苗床)では、露地栽培(雨よけなし)ほ場でのみ発生を確認し、発病株率は1.7%(一昨年2.0%、昨年0.0%、平成0.9%)と一昨年並、平年比やや多の発生であった。  
ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。  
エ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想で、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みであるため、雨よけしていないほ場では炭疽病が広がりやすい。
- (3) 対策 ア 育苗ほ場は必ず雨よけを行い、排水に留意する。  
イ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後には感染しやすいので、防除を徹底する。  
ウ 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、被害茎葉や被害株は速やかにほ場外に持ち出し袋などにいれて密閉処分し、伝染源を少なくする。

## 夏秋果菜類(高冷地)

### 1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 6月のトマト、キュウリの巡回調査では、トマトで発病株率は0.3%(平成0.1%)平年並の発生、キュウリでは発病は見られなかった(平成0.1%)。  
イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。  
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。  
エ トマトでは、平成15・17年は、6月の調査で発生が見られなかったものの、降雨量が多く日照時間が少ない気象であったため、7月の発生が増加していた。本年の気象予報でも降水量が平年並が多いという予想であり、平成15・17年と同様に発生する可能性がある。
- (3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。  
イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。  
ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ(高冷地)

### 1) 細菌性病害(黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病)

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、黒腐病の発病株率は2.7%(平成2.3%)と平年並の発生、軟腐病、黒斑細菌病は発生を認めなかった(平年の発病株率軟腐病、

黒斑細菌病共に 0.0 % )。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平年比少～やや少であった。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

( 3 ) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

## 野菜虫害

### 夏秋果菜類

#### 1 ) コナジラミ類

( 1 ) 発生量：やや少

( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率が 2.3 % ( 平年 11.9 % ) と平年比少、高冷地のトマトでは寄生葉率が 0.7 % ( 平年 1.2 % ) と平年比やや少、高冷地のキュウリでは寄生葉率が 1.3 % ( 平年 3.4 % ) と平年比やや少の発生であった。なお、確認された種はナスではタバココナジラミ、トマトとキュウリではオンシツコナジラミであった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

( 3 ) 対策 ア 今後定植する場合は、寄生苗を本ばに持ち込まないように注意する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

エ 「**トマト黄化葉巻病**」の育苗期の防除対策については別枠参照。

#### 2 ) アザミウマ類

( 1 ) 発生量：やや少

( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率が 2.3 % ( 平年 6.2 % ) と平年比やや少、高冷地のキュウリでは寄生葉率が 1.3 % ( 平年 2.7 % ) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は概ね平年並であった。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

( 3 ) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

イ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

ウ **アザミウマ類はメロン黄化えそウイルスを媒介するので、キュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期からアザミウマ類の防除を徹底する。**

### イチゴ ( 育苗床 )

#### 1 ) ハダニ類

( 1 ) 発生量：やや多

( 2 ) 根拠 ア 6 月の巡回調査 ( 育苗床 ) では、寄生株率 16.7 % ( 平年 1.0 % ) で平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

( 3 ) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

イ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ（高冷地）

### 1) コナガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生株率 16.7 % (平年 12.5 %)、10 株当たり寄生頭数が 2.5 頭 (平年 1.6 頭) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 野菜全般

### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスで発生が認められたが、イチゴ、高冷地のトマト、キュウリ、キャベツでは発生は認めなかった (平年の寄生株率ナス 0.0 %、イチゴ 0.0 %、トマト 0.0 %、キャベツ 0.0 %)。

イ 生産環境研究所 (合志市) とい業研究所 (八代市鏡町) におけるフェロモントラップによる 6月の誘殺数は平年よりやや多く、阿蘇市波野と山都町鶴底では平年並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、平坦地のイチゴ、キクで初発生が確認され、6月の発生量は平年並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

### 2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナス、イチゴ、高冷地のトマト、キュウリ、キャベツでは発生は認めなかった (平年の寄生株率ナス 0.0 %、イチゴ 0.0 %、トマト 0.0 %、キャベツ 0.0 %)。

イ 生産環境研究所 (合志市) とい業研究所 (八代市鏡町) におけるフェロモントラップによる 6月の誘殺数は平年並、山都町鶴底では平年より少なく、高原農業研究所 (阿蘇市一の宮町) ではまだ誘殺は認められていない。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月は平年並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並が多い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 「トマト黄化葉巻病」育苗期の防除対策！！

現在、促成トマト、ミニトマトの栽培が終了し、今後は次作の育苗が始まります。トマト黄化葉巻病の今後の発生を抑制するためには、感染源の除去と保毒虫のハウス内侵入を防ぐことが重要です。当面の対策として、以下の防除対策を徹底しましょう。

### < 育苗期の防除対策 >

- ( 1 ) 播種 10 日前までにハウス内・周囲の雑草を防除する。
- ( 2 ) 育苗施設の開口部（サイド、換気部など）には必ず防虫ネットを設置する。  
なお、ネットの目合いは小さくするほど侵入を阻止する効果は高いが、高温対策に留意する。
- ( 3 ) 近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを 150 cm 幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。
- ( 4 ) ハウス内に黄色粘着トラップを設置し、侵入したコナジラミの密度を低下させる。
- ( 5 ) ハウス内へのコナジラミの侵入状況を見ながら系統の異なる薬剤を散布し、育苗後期には登録のある粒剤をポット処理する。
- ( 6 ) 発病苗は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに施設外に持ち出し処分する。
- ( 7 ) 野良生えトマトは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

## 農薬安全使用上の留意点

ポジティブリスト制が平成 18 年 5 月 29 日に施行されました。全ての農薬、作物に残留基準値が設定され、基準値を超えたものは流通が禁止されます。薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守すること。また薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底すること。

詳しい内容等については  
生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>」上で公開しています。